



トリニダの遺跡 - トリニダ市

JICA パラグアイ事務所

事務所便り

No 94

2015年8月号

目次

【帰国研修員たちの声】～日出国の感想～	2
【帰国研修員たちの声】～地域貢献を目指して!!～	3
【専門家の活動紹介】～地域と歩む学校づくり支援プロジェクト～	4
【青年ボランティアの声】～大会に参加！ ～ウルグアイ遠征～	5
【シニアボランティアの声】～再びパラグアイの大地へ～	6
【パラグアイ文化紹介】～カルリン～	7
【JICAパラグアイの動き】～2015年8月～	8

【帰国研修員たちの声】

～日出国の感想～

マリア・マグダレナ・チェナ氏

アナ・アイダ・サントデル氏

去る1月25日～2月7日にかけて日本で実施された「地方教育向上～ミレニアム開発及びEPTの目標達成に向けて～」研修には、日本、グアテマラ、ホンジュラス及びニカラグアから数名の教員が参加しました。新しい友情の絆を築くともに、日本での研修がより楽しい経験となりました。

パラグアイからは、就学前・初等基礎教育総局のMaría del Carmen Giménez Sivulec 局長、初等基礎教育のAna Aida Santander de Riquelme教育技師、教育課程強化総局のMaría Magdalena Silvero de Chena教育技師とカリキュラム総局のZonia Maricel Centurión Benítez教育技師の4名が参加しました。



研修メンバーと

日本の地方教育とパラグアイをはじめ、研修に参加した国々の地方教育の現状を比較してみると、類似点が沢山あることが分かりました。

各参加国における地方教育の問題点を日本の地方教育方針を基に確認・分析すると、パラグアイの教員に対する規制やインセンティブが足りないことが明らかになりました。そのため、私たちのアクションプランでは、この弱みを強化することを強調しました。



日本の学校見学

研修期間中、日本人専門家による複式学級制度を中心とした講義にも参加しました。また、次に述べる学校では、一般授業や公開授業の戦略等を見学することが出来ました。

- 筑波市のかまさや小学校
- 山梨県小管小中学校
- 茨城国立大学付属小学校

これらの学校では、生徒たちと給食を一緒に食べたり、パラグアイでは見ることが出来ない雪を近くで見ることが出来ました。美しい雪景色にとっても感激しました。

研修の成果として私たちは、複式学級を有する教員を対象に教材作りや研修を取り入れたアクションプランを作成しました。

また、研修中に行われた現地メディアの取材には、研修員を代表してパラグアイのMaria del Carmen氏が対応しました。



貴重な機会に感謝！

日本人教員が日々示す仕事での時間厳守と責任感は、見習わなければならない姿勢だと改めて感じました。

日本での経験は一生の思い出となりました。日本文化だけでなく色々な国の文化に触れることが出来たり、鎌倉や富士山を江の島から見ることも出来ました。

また、何よりも日本での滞在が最高であるように日々気を配って下った日本の皆様の親切さに感謝したいと思います。どうも、ありがとうございました。

【帰国研修員たちの声】

～地域貢献を目指して!!～

堤田昭宏

日本人に見えるパラグアイ国籍（日系2世）の堤田竹崎昭宏と申します。

両親の出身地は熊本県、私はSan Lorenzo市の市場内にある病院で産まれました。私は日系パラグアイ人として母国パラグアイへの貢献を始め、日本との架け橋になりたいことは高校を卒業するぐらいから考えておりましたが、どのような分野あるいは方法がいいのか悩んでいた時、父から「人は食べることを決してやめないから、農業関連ではどうだ」とアドバイスを受け、農業分野を進めて行くこと決めました。2005年に東京農業大学（東農大）国際食料情報学部国際バイオビジネス学科に入学、2009年に同大学を卒業しました。パラグアイへ帰国し、実家の農業を手伝うも自分の知識が未熟だと感じ、日本でもう一度勉強することを決意しました。「JICA日系社会リーダー育成事業」のスカラシップで筑波大学大学院生命環境科学研究科生物資源科学専攻へ進学し、修士号を取得しました。



筑波大学時代の友人



東農大卒業時

東農大では農業を中心とした経営学・マーケティング学・環境学・情報学を学びましたが、農業経営学について知識を深堀するために筑波大学大学院では「農業経営学および関連産業経営学研究室」に所属しました。同研究室では、フィールドワークに重点をおいて積極的に農家訪問を繰り返すことが多かったことで、農家が抱えている課題・解決策等を直接、ヒアリングすることができたことと農家さんと直接つながることになったのが自分にとって大きな財産だと考えています。

修士号取得後はパラグアイへ帰国を検討しておりましたが、社会人経験を積んでからでも遅くはないと考えて、就職活動をしました。「パラグアイへ農業あるいは食料部門で事業展開をしている」企業への就職を希望しており、現在所属している「株式会社グローバルジャパン」に出会うことが出来ました。本社所在地は広島県尾道市にあります。1956年（戦後復興期）に常石グループ2代目社長の神原秀夫が広島県沼隈郡（現・福山市）沼隈町の町長として、パラグアイへ移民団を結成したことが南米との関わりが始まりました。同社は、穀物を輸送するバルク船を4隻と家畜運搬船1隻を所有しています。また、パラグアイ・ビジェタに26,000haの土地を所有しており、パラグアイ川の河川輸送に必要なプッ



GLOBAL BULK

シャー・バージを建造する造船所「Astillero Tsuneishi Paraguay S.A.」事業を始め、農業開発計画（畜産・植林）、レジャー開発計画（ゴルフ場・遊園地）、都市開発計画プロジェクトを有しています。その中の農業開発プロジェクトに私が日本で学んだことを活かせるよう日々、頑張りたいと思います。このプロジェクトが実現することによって地域の雇用創出や経済成長につなげたい考えです。

最後に「JICA日系社会リーダー育成事業」留学制度のおかげで、自身の知識を深めることができ、さらに多くの知人とつながることが出来ました。なにより、海外に出ると様々なことを経験でき、自分の視野を広げることが出来るので素晴らしいと思いました。次の世代も続けて本事業を活用できるようアピールし、留学を終えた奨学生のつながりを構築したいと考えております。

【専門家の活動紹介】

～地域と歩む学校づくり支援プロジェクト～

大谷 雅代

地域と歩む学校づくり支援プロジェクト

2013年8月から3年間の予定で開始された本プロジェクトもちょうど折り返し地点です。

プロジェクトの対象は東北部4県（アルトパラナ県、イタプア県、カアグアス県、カアサパ県）の全基礎教育中央校の約400校です。2006年～2009年に実施された学校運営管理プロジェクトの成果を受けた後継プロジェクトとして、初等教育レベルの学校長の学校運営管理能力の向上と地域に根差した教育の推進を目指して開始されました。

私とパラグアイとの付き合いは長く、JOCV（5-2次隊）として1993年にサンペドロ県サン・エスタニスラオの教員養成校において教員としての活動が始まり、2004年から1年半教育分野のプロジェクト形成のための企画調査員、2006年から3年間は技術プロジェクトの専門家として派遣されました。

企画調査員として多くの小学校を視察して一番実感したのが、校長先生の力量やリーダーシップによって教員も子ども達も変わるということです。意欲や能力のある校長先生の率いる学校では、教員がチームとして組織化され、学校内部も清潔で掃除が行き届いており、子どもたちの態度も学習環境も優れていました。また、コミュニティや父母会、NGOや民間企業等からの支援を取りつけることにも積極的なため、学校施設の整備や教材等への資金や労働力も集まり易いという点もありました。しかし、パラグアイでは学校長になるための試験も研修も行われていないため、多くの学校長が必要な知識を得ることなく職務についているのが現状です。そこで、学校長のための学校運営管理能力向上を掲げて学校長向け研修システムを構築すべくJICAの技術支援がスタートしました。



校長研修参加者への修了証授与式・カアグアス県

真剣な様子で課題に取り組む講師たち



本プロジェクトでは、各学校における学校運営計画（Proyecto Educativo Institucional: PEI）と学校カリキュラム計画（Proyecto Curriculum Institucional: PCI）の作成を通じて、学校の現状を分析し、目指すべき目標を掲げ、それに沿って計画的に学校活動を行っていくよう指導しています。プロジェクト活動のメインは、PEI/PCIの作成マニュアルの作成、4県12校の教員養成校による校長研修実施、地域の教育視学官（スーパーバイザー）による学校モニタリング・評価活動の強化です。また、地域に根差した教育活動を推進するためのモデル学校づくりへの支援も行っています。

教育文化省就学前・基礎教育総局内にプロジェクトオフィスを構え、活動部隊であるユニットを結成し、日々CP達と協働（格闘！）しながら活動しています。教育省職員であっても中長期的展望に立ったプランニングや成果に向けたプロジェクト管理の経験が少ないため、OJTとして計画・実施・結果分析・評価・反映という一連のサイクルにおけるマネジメント等、CPの能力向上も担っています。



講師研修の参加者・イタプア県ジャトウタウ市教員養成校

頑張っている校長や先生達を見ると本当に嬉しくなります。スーパーバイザーや教員養成校講師らの学校へのサポートも欠かせません。同じ地域の関係者が一つの目標に向かって皆で活動している地域では、確かな成果が上がっています。

【青年ボランティアの声】

～大会に参加！ ～ウルグアイ遠征～

澤田和哉（体操競技）

青年海外協力隊

私の配属先は、1988年に日本の無償資金協力によって建てられた「人造りセンター (Centro Paraguayo Japonés)」です。この施設内には語学教室や体育館、劇場などがあり、誰でも使用できることになっています。私はその施設内にある体操教室で、平日の午後を中心に活動しています。生徒の数は約150人近くおり、幼児から大人まで幅広く練習をしています。現在の活動内容は生徒への指導を中心として、活動しています。

○ウルグアイでの大会に参加

6月6日～7日にウルグアイのモンテビデオで行われた体操競技の大会に参加してきました。

今回の大会は私が配属されてからは初めての大会であったため、選手たちが大会ではこういった動きができるのか、また、配属先はこれまでにどれくらいのレベルの大会に参加してきたのか等、これから活動をしていく上でも、重要な大会でした。また、選手からしても今年初の大会であったため、これまで練習してきた成果がやっと試せることを、とても楽しみにして臨みました。



生徒に囲まれて



優勝したパラグアイ代表

○大会結果

今回の大会は各年齢と各技術レベルによってレベル分けされており、私の配属先からは17名の選手が各自の能力に見合ったレベルに出場しました。その結果は優勝者が2名、準優勝者が2名、6位までの入賞者が3人という結果でした。しかし、失敗してしまったために優勝・入賞を逃してしまった選手も多く、課題の残る結果となりました。この結果を今後の活動に生かしていきたいです。

その後、大会から帰るときに嬉しいことがありました。それはこの左の写真に写っている優勝者からいただいたコメントです。

“これまで6年間練習をしてきたけれど、こんな経験はできなかった。これからはもっと大会に出場していきたい！”

この選手はこれまで大会に参加することに消極的でした。その選手からこんなコメントをいただいたことは、本当に嬉しかったです。

今回この大会に参加したことで、私の配属先が目標としているものを自分の目で見て確認できたことが一番の収穫でした。今後の活動の糧としていきたいです。他にも技術レベルだけでなく、パラグアイ国内で体操競技を行っていく上での環境改善等、まだまだ様々な課題があります。そのような内容についても、少しでも解決して、パラグアイ国内での体操競技普及をしていけるように頑張っていきたいです。

【シニアボランティアの声】 ～再びパラグアイの大地へ～

水野 新（自動車整備）

シニア海外協力隊

35年前にパラグアイ職業訓練センター（CEV）プロジェクトの専門家として立ち上げた、カルロスアントニオロペス工業高校・職業訓練校（CT Y CEV）に、昨年10月シニア海外ボランティアとして戻ってきました。建物や機材はもちろんのこと、木々の一本一本までが懐かしい思い出があるところです。

過去と現在

変わったところは「高層ビルやショッピングセンターができた」「人や車が増えた」「昼休みがなくなった」「町がきれいになった」「健康志向になった」などです。

変わらなかったところは「パラグアイの匂い」「旧市街地の街並み」「優しくてお人好しで話好き」「時間と労力はタダという感覚」「人も車も交通ルールを守らない」「マテ茶（テレレ）を何時も飲んでいる」などです。

感動したことは「当時の機材を訓練に使い続けている」「その時に作成した実技教科書を使っている」「我が国の協力哲学が次世代まで引き継がれている」などです。



職場の同僚と生徒たち

地道な活動

当時「手を洗う習慣がない」「トイレがない、汚い」「食べず嫌い」などと言われていました。それが「手を洗う」「掃除をする」「葉物野菜を食べる」「健康に気を遣う」など生活習慣が飛躍的に改善されていることに驚きを覚えました。これは、第一に、当国の教育や生活水準の向上及びインフラの整備があげられますが、日系人や専門家やボランティアの地道な活動や努力が成果として目に見える形になってきたと言っても過言ではないでしょう。

「三ない」状態

ボランティア活動で「金がない」「物（機材）がない」「やる気がない」の「三ない」を耳にします。40数年前に、日本で職業訓練



授業風景

に携わったころは、「金も物もない、あるのは建物と生徒だけ」でした。また「汗を出せ」「知恵を出せ」とも言われ続けました。一方、訓練現場では「やって見せ、やらせて見て、確認（評価）する」「相手（生徒）ができないのは、（自分が）教えていなかったからだ」を繰り返し叩き込まれました。その経験から、今回のボランティア活動でも「一緒に働き」「一緒に学び」お互いが成長しながら、「人づくり」のお手伝いと「恩返し」が少しでもできればと願っています。

ボランティアの特権

職業人生の後半は管理部門でしたので、現場の「カン」を取り戻すのに多少の時間が必要でした。でも、学生と一緒に整ったエンジンが動いた、故障していた機材が動き出したとき、学生たちが歓声をあげて喜び合い、成長していく姿を見ることができるのは、ボランティアの特権かも知れません。

おわりに

技術移転や生活習慣の改善は、息の長い活動になるでしょう。任期中にその成果を見ることができないかも知れません。しかし、その活動は、着実に人をとおして受け継がれ、花が咲き実をつけていることを、35年振りに当地に戻ってきて体感し、実感できたことに喜びと感謝の気持ちで一杯です。でも、活動をすれば必ず挫折や不安やあせりが付きまといまいます。そんな時、パラグアイの灼熱の太陽、澄み切った青空、緑の大地、満天の星空が、明日に向かう我々の背中を押してくれることでしょう。 ¡VIVA PARAGUAY!

【パラグアイ文化紹介】

～カルリン～

“悪運を取り除くため七滴、8月の災厄を祓うため三口、病気にならないようにコップ一杯”

パラグアイ国民にとって8月は、冬の中で最も気温が下がり、冬最後の大寒波がやってくる年の中で一番困難な月だといわれており、「お年寄りや病人、やせた牛が逝ってしまう」というグアラニー語の句もあるほどです。

そのような厄を祓うため、パラグアイでは8月1日の朝、朝食前にカルリンを飲みます。

カルリンは、カーニャと呼ばれる地酒に、ヘンルダという植物の葉とレモンの果汁を加えたカクテル。



ヘンルダは、グアラニー族の時代より身も心も浄化してくれる薬草として重宝されてきました。またとある文化では、正の感情を解放する「許し」という意味を持つ花で謝罪の時にはヘンルーダの花を相手にあげていたのだとか。

現在のカルリンには、ヘンルーダとレモンだけでなく、agosto poty、pyno' i、ka' apiky、taropé verbena、perdudilla、cepacaballo、romero、guavirami、等7種もの薬草が入っています。

8月にパラグアイに滞在中若しくは訪問予定の皆様、カルリンで悪運や負の気持ちを吹き飛ばしましょう。

注：ヘンルーダは取りすぎてもよくありませんので（死に至る）、カルリンの飲みすぎには十分ご注意ください。

【JICAパラグアイの動き】

～2015年8月～

- 7/27～8/8 教師海外研修 （十北地方より日本の学校の先生方がパラグアイに来て、現地の状況を視察されます）
- 8/2 ピラポ移住地 入植際（55周年）
- 8/8 アスンシオン 成人式
- 8/10 小野企画調査員着任
- 8/15 （当国休日）
アスンシオン創立記念日
- 8/21 ラパス移住地 入植際（60周年）
- 8/22 帯広畜産大学短期ボランティア着任



Oficina de la JICA Paraguay

Edificio CITIBANK CENTER Piso 5
Mcal. López 3794 esq. Cruz del Chaco

TEL. +595-21-608400/4 FAX +595-21-608406/7

E-mail: pg_oso_rep@jica.go.jp

www.jica.go.jp/paraguay/espanol
